呼び声

東雲(しののめ)の肢体をなぞると

想いは祈りとなって冷気に溶け入り
己が意思は全て余韻となる

私はこの時間に隠れ棲む者である
生を眠りの中に残したままに
この時間にのみ息衝く者である

夜が明けてしまえば
生は眠りから目覚め
私は虚無の中で眠りにつかねばならない

誰も私の思いを知ることはなく
遠く―――、ただ遠くに呼びかける声を聴く
それは夜明けと共に消えゆく「生」の想いなのだ

眠りの中に私は身支度を始め
社会に合わせて生を取りつくろう・・・
何と滑稽な世界のみを、陽光よ、お前は照らしてきたことか！

私に世界を背負うことがはたしてできることか
生と反生が互いに打ち消し合うことなく混じり合う
そんな世界というものを

(1992.8.13)